

2022年11月20日 降誕前 第5主日礼拝

メッセージ「正しい若枝」

岡嶋千宙伝道師

聖書 エレミヤ書 23章1-6節

今月の8日から20日まで、エジプトのシャルム・エル・シャイクという紅海に面した観光都市で、「COP27(国連気候変動枠組条約第27回締約国会議)」が開催されました。世界で排出される温室効果ガスのうち、たった3%の排出量しか占めていないのに、その悪影響をもっとも大きく、また多く受けているアフリカの国で開催されると言うことで、「アフリカ COP」ともよばれたこの会議。地球規模での環境政策を推進するにあたり、大きな前進をもたらすのでは、と期待されていたのも束の間、開催前からホスト国エジプトによる人権活動家や環境活動家に対する抑圧が行われ、また当日には、環境保護団体の公式参加が認められないのにも関わらず、他方では化石燃料の利用を促進する600以上の団体の宣伝ブースが設置されるという、矛盾と皮肉に満ちたものでした。その会議について、会期中の11月15日に、ウガンダの環境活動家ヴァネッサ・ナカテさんが、会場前で海外の報道番組でのインタビューに応じていました。その日、11月15日に26歳になるというナカテさん。自分の国ウガンダもその一部であるアフリカの現状について、淡々と、でも揺るぎのない決意と思いと込めて語っていました。「長年の気候変動によって、アフリカの国々では、大型の台風や、干ばつ、そして、急激な気温上昇による火災が続いている。最近訪れたケニアのある街では、多くの子どもたちが、水や食料を得ることができず、栄養失調に陥り、少なからずの子どもたちが、命を落としている」。ナカテさんは、これ以上、被害、損害、喪失が広がらないように、各国が2015年のパリ協定で掲げられ、去年のCOP26で同意された目標、つまり、今後の世界の平均気温の上昇を1.5度に抑え込むことを現実に行かなければならないと語っていました。同時に、これまで温暖化物質を排出し続けて来ている国々が、気候変動による影響を大きく受けている国々、とくにアフリカ諸国や太平洋諸国に対して、技術提供や損害補償などの責任ある行動をとっていく必要がある、とも強調していました。わたしは、温暖化がこれまでにないペースで進み、その影響が無視できないほどの広がりを見せていることに改めて驚くと共に、では「自分は今、どこに立っているのか」という思いに駆られました。スイッチを押せば電気がつく。蛇口をひねれば水が出る。数分先のスーパーやコンビニに行けば、好きな食べ物を買うことができる。その便利さ・快適さの背後で、多くの温暖化物質が排出され続けている。そのことに自分はどれだけ自覚的であったか。先進国に住む者として、この世界の他の場所に生きる人たちに対して、責任ある生き方をしてきたのだろうか。わたしが気づいていない、あるいは知ろうとしないだけで、わたし自身の快適さを保証するために排出される物質が、他の国の人々の生活環境を壊し、生きる場を、命を、将来を、未来を、奪ってきたのではないか。

本日の御言葉。エレミヤ書 23章 1~6節。冒頭から、何やら、ものものしい雰囲気

気です。「災いあれ」。「幸い」ではありません。日本語では「災い」と「幸い」とは、正反対の意味を持つ言葉ですが、音の響きは似ています。だからかもしれません、今日の準備をするためにこの箇所を読んだとき、始めのうちは、「幸い」と読んでしまっていました。あれ、何かおかしいなと思い、よく見てみると、「災い」。とても厳しい言葉です。神は、「牧者」と言われる人たちの「悪行」(23:2)に対して、非難の言葉を向けるのです。「牧者」というのは、本来、その保護下にあるものたちを守り育て、愛し、慈しむ存在です。その牧者が非難されているのは、守るべき羊たちを「滅ぼし」「散らし」(23:1)、「追い払い」、そして「顧みなかった」(23:2)からです。エレミヤ書の著者とされるエレミヤが活躍した中東、地中海東岸地域の伝統では、「牧者」とは、もちろん、実際に牧畜に従事する人を指していたのですが、別の文脈では、国の王様をはじめとする、施政者たちを表す比喩的な表現としても用いられていました。国民は、牧者によって保護される存在、本日の聖書箇所では羊、羊の群れと言われている側。この牧者と羊の群れのイメージ。教会にしばらく通ったことのある人なら、詩編 23 編の「主は羊飼ひ」という詩を思い浮かべるかもしれません。その牧者であり、国の統治者である人たちに対する非難の言葉が語られるのですが、では、何が悪かったのかというと、前の二つの章、21 章と 22 章に記されています。王様が、自分の住む宮殿を立派なものにするために、人々に賃金を与えずにタダ働きをさせる(22:13)。利益追求のために人々を殺し、搾取をする(22:17)。あるいは、本来は、保護されるべきである、寄留の外国人、孤児、夫を失った女性など、弱い立場にある人たちを、より苦しめて虐げている(22:3)。本日の 5 節では、神が王に代わって「この地に公正と正義を行う」者を立てる、と語られていますが、当時の状況は、つまり、公正と正義を行う施政者がいなかったということです。

本日の前半部分、1~4 節で着目すべきなのは、悪行を行う牧者によって滅ぼされ、散らされ、追い払われ、顧みられなかった羊たちのことが、神によって、「わたしの羊」「わたしの民」と呼ばれていることです。その羊たちを虐げる牧者たちが「あなたがた」と、どこか疎遠な感じで呼び掛けられているのは対照的です。国家の中央にいて、権力をほしいままにし、自分の利潤や快適さを追求し、あるいは政治権力の保持のためにやっきになっている権力者や施政者たち。その者たちが決して目を向けないところ。その者たちにしてみれば、何の価値もなく、全く生産性のない不毛の地。食べ物が育たず、生き物が生息し得ない荒廃しきった土地。彼らにしてみれば、目を向けられなくて当然。見捨てられて当然。そこに生きる人々と、その生活の場、命の場。そこにこそ、神は目を向けます。神にとっての近しい存在とは、牧者ではなく、虐げられている側の人たち。そこに生きる人たちをこそ、神は「わたしの民」「わたしの羊」と呼ぶのです。そして、今、神は、自ら、その人たちを自分のもとに呼び集めると誓います。神のもとに呼び集められる人々、羊の群れは、今後

一切、差別に苦しむことも、搾取に怯えることも、抑圧にすり減らされることもありません。そんな環境を整える存在、新しい命が育まれる環境を創り出す存在が、神によって新しく立てられるのです。新しい牧者。「正しい若枝」と呼ばれる、新しい王が、今、人々の間に立てられようとしている。若枝が生まれる。その若枝は、「正しき」存在として、これまでの王や施政者たちが忘れていた「公正」と「正義」を行うと言われます。その姿を、やはり前の 21 章と 22 章から伺い知ることができます。その者は、「朝ごとに正しい裁きを行い、搾取されている人を虐げる者の手から救い出す」(21:12)。自分自身は、「質素な生活を」「貧しい人、乏しい人の訴えを裁いて」、自分自身については「質素な生活をする」(22:15-16)。そして、「正義と恵みの業を行う」(22:15)。

みなさんは、今日のこの御言葉をどう感じ、どのように受け止めるでしょう。厳しい言葉と、反対に、励まし、それに希望の言葉がどちらも語られていて、そのどちらに重きを置くかで、印象も異なってくるのかもしれませんが。わたしは、というと、厳しさと希望と、そのどちらかではなく、そのどちらも含めて、ここには、神からのわたしたち一人ひとりに対して向けられた問いかけ、そして、その問いを受けて先に進むことへの促し、あるいは招きが含まれているように感じられます。「あなたはどこに立ち、どんな姿で生きているのか。誰と共に生きているのか。そして、これからを、どのように、どんな人たちと歩もうとしているのか。」力ある者、強き者、多数の側にいる者たちから嫌われ、周辺に追いやられ、国家の支援の枠から外され、人としての尊厳すら奪われている人たち。弱くされ、弱さを抱え続ける人たち。その者たちの間に、その者たちの生きる場に、その者たちと共にある存在として神が備える「若枝」。木の幹ではなくて、「枝」。しかも「若い」枝。弱くされた人たちの間に備えられるその若枝は、それ自体が弱き存在なのではないでしょうか。その枝が、これからどう成長していくのかは記されていません。ひょっとしたら、成長途中で、力ある者に、へし折られてしまうかもしれません。周りの影響を受けて、次第に、正しさを忘れ、神によって批判されているこれまでの権力者たちと同じように、弱者を虐げるようになるかもしれません。若枝を生まれさせたのは、確かに、神です。ですが、その枝がどう成長するのかは、神お一人の力だけによるものではないのでしょうか。神は、そこに、人間の介在を求めています。正しい若枝を与えられたわたしたち一人ひとりが、これからどう生きていくのか。その枝と、どう関わっていくのか。あるいは、その枝のもとで生きる他の人たちと、他の存在とどう関わり、生きていくのか。そして、その枝が根を下ろすこの土地、この地球、この世界と、どう関わっていくのか。わたしたち一人ひとりに担わされる役割。その責任を思うとき、忘れてはならないでしょう。神の存在、神の視点を。もちろん、人は神ではなく、神になれるわけでもありません。神の意思を、視点を、人は、すべて理解し、認識できるわけではありません。その一部ですら、理解できはしないでしょう。でも、だからこそ、忘れてはな

らないのだと思います。わたしたちのこの命をもたらし、この命を続けさせてくれているのは誰であるのか。わたしが生きるこの地が、まだなお存続しているのは誰のおかげなのか。自分だけの、この時だけの視点ではなくて、神の視点を、神の向いているところを、忘れない。もし、わたしたちが、「これこそが神の求める正しさだ」と言って、自分の思い描くあり方に固執するのなら、それは神とは真逆の方向ということになるでしょう。そうではなくて、常に、正しさとは何か、公正とは何かを問い続けていく。人間の描く一つの正しさの基準にこだわるのではなく、ときにそれを打ち破って、問い続ける。今ある正しさや公正さから漏れている人はいないだろうか。人間の、自分の、社会の描く正しさによって、傷つき苦しむ人はいないだろうか。問いを発し続け、自分の視点に限界があることを認識し、神の視点を求め続ける。時に間違いもあり、失敗もしながら。

わたしたち一人ひとり、それぞれに、生きる場があって、それぞれの場で、苦しんだり、悲しんだりします。悩んで動けなくなり、もう生きることすらできないと思うこともあります。迷いながら、苦しみながら、でも、だからこそ、なんとか、その場を自分にとって快適なものにしたいと、その場でうまく生きることができるようになりたいと、力を尽くします。だけど、「その場」をどうにかしようとするほど、「その場」でなんとかしようとするほど、それ以外が、見えなくなってしまうことがあります。実は、今、この時、この場で懸命に生きているそのあり方が、他の場所、他の時に生きる誰かを傷つけているかもしれません。その人たちの生活を壊しているかもしれません。その人たちの生きる場を奪っているのかもしれません。わたし自身、こうしてメッセージを語っていながら、自分の快適さ、それは、精神的であっても、物質的であっても、自分にとっての生活の質を保つために、他の人の生活と命を犠牲にしているかもしれません。いや、実際にしているのでしょう。そのことに無自覚ではられません。だから、立ち止まって、見渡してみるのです。耳を傾けてみるのです。感じてみるのです。蔑ろにされている命はないだろうか。消されている声はないだろうか。忘れられている痛みはないだろうか。そして、その命、声、痛みがある場所にこそいる神の存在を、見失ってはいないだろうか。神が人々の間に与えた若枝。キリスト教の教えでは、それはナザレの町に生まれたイエスであるとされているようです。ですが、ユダヤの人々の歴史を無視して、一方的にそれがイエスだ、と主張するのは、それこそ、自分たちの側にこそ正しさがあると言うようなもので、神の視点から外れることになるように思えます。イエスであるかどうかには拘るのではなく、神が備えてくれている若枝をこの身の側に感じ続けていきたいと願います。そして、その枝のもたらす実りを無駄にしないために。その枝が、これからも、正しく、そして、公正と正義をこの地にもたらす存在としてあり続けるために。わたしは皆さまと共に、また、この世に、この世界に生きる一人ひとりと共に、思いをあわせ、祈りをあわせ、神の向く方向を忘れずに、歩んで参りたいと願います。